

アスリ
は竹沢
だ。

開幕

未踏の9秒台手応え

たメンバーから朝原直治

「ダーの自覚も芽生え、開幕前に「こころは勝負の年」と宣言した。シャマイカ走去の「えは(9秒台の)可能性はある」といふ。野郎こ

石川「チャンスあ

SCENE 2009

◆第3話 練習環境

ダウン症とレスリング

文||武藤 龍大

大

楠ジュニアレスリングクラブに通うダウン症児者6人の中で最年少の加藤大輝君(8)は、自宅で2人の兄とレスリング「こころ」をして遊んでいる。兄の体は引っかけ傷が絶えない。母真澄さん(35)は大輝君のわんぱくぶりに手を焼いているが、「こころ」が心地よい。

「初めは泣いてばかりで。昨年11月に入門した大輝君は2度目から拒むようになつた。格技場の前で泣きわめき、真澄さんが引きずるようにして連れ込む。マットまで抱きかかえて運んだ。変化が見られたのは、何回か練習に参加してからだっ

健常者とのふれあい

誕

生直後の大輝君は、弱々しい泣き声を出していた。1カ月後、ダウン症と診断される。2年後には頸椎が弱いことを知らされた。「心配で目が離せなくなつた。将来はどうなっちゃうのかしらと、ずっと不安だっ

た。大輝君が5歳の時、あるスポーツ教室に通わせた。そこで健常者に交じって運動する難しさを痛感させられる。ダウン症児はたった一人。専属のコーチまでつけてくれたが、特別扱いにかえって気が引けた。暴れて、同じクラスになった年下の子供たちにけがをさせないかと心配が絶えない。コーチには「遠慮しないで」と声を掛けてもらったが、どうしても遠慮が先に立つ。

ダ

ウン症の息子がいる知人から大輝クラブ

約1年後、引越しを機に退会する。

嫌がれば、無理強いはいらない。「ゆっくりでいいよ」と

を紹介され、体験入門したのは昨秋。健常者の子供たちが務めるサポーターに好感を持った。

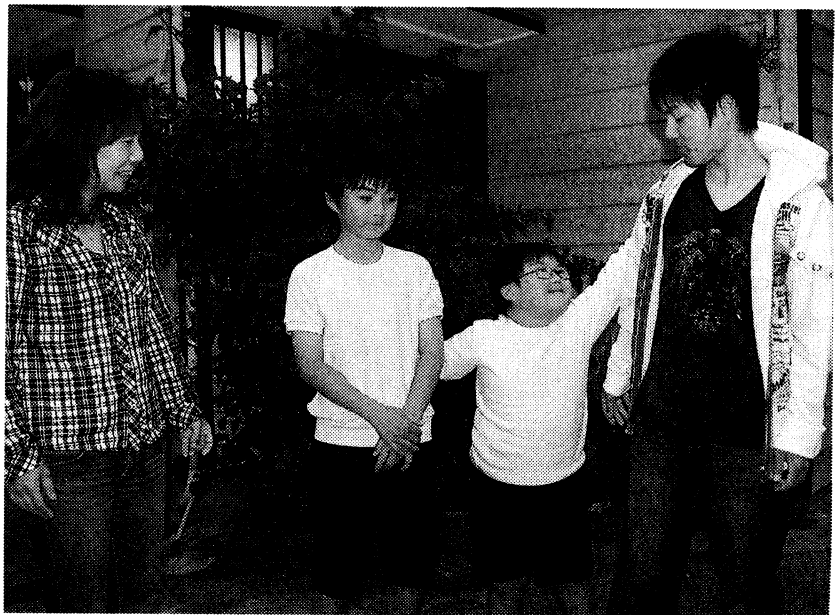
声を掛ける。「言葉を発しないから、何を言いたいのかわりにくいと思うけれど、サポーターの子供が根気強く接してくれる」。身体能力に応じた練習。同じダウン症の生徒と競える環境。同世代の健常者とのふれあい。求めていたものがそこにあった。休憩が終わっても立ち上がるようにしない大輝君を、サポ

母真澄さんと2人の兄に囲まれ笑顔を見せる加藤大輝君(右から2番目) 三浦市の自宅

た。無邪気な笑顔がかえって胸を締め付け、涙があふれた。

大輝君が5歳の時、あるスポーツ教室に通わせた。そこで健常者に交じって運動する難しさを痛感させられる。

ダウン症児はたった一人。専属のコーチまでつけてくれたが、特別扱いにかえって気が引けた。暴れて、同じクラスになった年下の子供たちにけがをさせないかと心配が絶えない。コーチには「遠慮しないで」と声を掛けてもらったが、どうしても遠慮が先に立つ。



「サポーターが手を引いて仲間の輪の中に連れ戻す。練習を嫌っているわけではない。」「手を引いてもらいたくて、わざと立たないのよ。甘えているの」。大ちゃんにとって最も居心地が良い場所。真澄さんには、はつきりと分かる。

今、初声小に通う2年生。「何年かすれば健常者と一緒になり合っているのかな。そうならば本人の自信になる」。別の生徒が力強く組み合っている光景を見つめ、息子の成長した姿を想像してみる。気付けば将来への不安は薄れて

◆ダウン症と治療 ダウン症は遺伝子を変化させるため、根本的な治療方法は無い。元来体質的に虚弱とされるダウン症児者だが、社会的な理解が進んだこともあり、積極的な運動や外科的治療で健康状態の改善が可能になることが分かっている。平均寿命は十数年前には20歳前後とされていたが、現在では50歳程度に延びている。また知的レベルの面でも、適切な養育・教育で発達を後押しできると考えられている。